

令和 7 年度 県立竜ヶ崎第一高等学校・附属中学校 自己評価表

目指す学校像		10 年先を透徹した生徒主体の探究型学習を通じ STUDENT AGENCY を育む		
三つの方針		具体的目標		
「三つの方針」(スクール・ポリシー)	「育成を目指す資質・能力に関する方針」 (グラデュエーション・ポリシー)	【高潔】自立した国際人の育成に向け、「一高」としての高い使命を貫徹する 【誠実】まっすぐ学びに向き合う、誠実で理知的な学びの場となる 【剛健】質・量ともに高い結果を目指し、あくなき挑戦を続ける 【協和】異文化に胸襟を開き、受容的で持続可能な社会の範となる		
	「教育課程の編成及び実施に関する方針」 (カリキュラム・ポリシー)	【生徒】21 世紀の国際社会に通用する主体的な学び手を創る 【学校・教職員】時代にあった合理的で生産的な学校運営を行う 【地域社会】地域と連携し共に成長する、開かれた学校となる		
	「入学者の受入れに関する方針」(アドミッション・ポリシー)	○高等学校全日制課程 本校の教育課程(カリキュラム)ならびに教育課程の編成及び実施に関する方針(カリキュラム・ポリシー)にもとづき、高等学校において学びを深めながら、自らのキャリアを主体的に切り拓くために必要な、十分な基礎学力と学習意欲を有する人材。その上で、社会や自然に興味関心を持ち、それを行動や表現に移してきた人材 ○附属中学校 本校の教育課程(カリキュラム)ならびに教育課程の編成及び実施に関する方針(カリキュラム・ポリシー)にもとづき、中学校において学びを深めるために必要な、十分な基礎学力と学習意欲を有する人材。その上で、社会や自然に興味関心を持ち、それを行動や表現に移すことのできる人材		
昨年度の成果と課題		重点項目	重点目標	達成状況
教科中心のカリキュラム・マネジメント、ターゲットされた生徒募集など施策が徐々に浸透しつつある。生成 AI をはじめとしたデジタル領域の実践は国内有数の域に到達した。昨年度は SSH 第Ⅲ期(文理融合・重点枠)1 年目にあたり、学校経営と SSH 運営の統合、ならびに全国区での発信に耐える教育開発・実践の質向上に向けた運営の転換を図った。附属中開設 6 年目の節目にあたり、中高のサイロを払底し中高一貫した縦のカリマネを完成させること、データ分析や生成 AI を学力向上につなげていくこと、成果の質を高め発信を強化すること、新任の管理職・教諭を早期に戦力化し、運営品質をこれまで以上に高めていくことが課題である。		【生徒】21 世紀の国際社会に通用する主体的な学び手を創る(ラーニング)	総合知を用いた真正な探究学習を通じ本物の課題解決力を育む(SSH テーマⅠ)	C
			ゆるぎない教科指導を通じ基礎学力を固める(SSH テーマⅡ)	C
			開かれた学びと異文化との出会いを通じ、自ら行動し創造する力を育てる(SSH テーマⅢ)	B
			最先端のデータ・デジタル技術を身に着けた、卓越したイノベーション人材を育てる(SSH 重点枠)	C
			異文化との接触を当たり前の日常にする	B
			ポストヒューマン時代の生き方を啓発し学ぶ動機につなげる	B
		【学校・教職員】時代にあった合理的で生産的な学校運営を行う(オペレーション)	カリキュラム・ポリシーにもとづく 6 年間一貫した学びを提供する	B
			生徒の AGENCY(自由と責任を扱う力)を育む学校生活を演出する	A
			多様な学びを促進する学習環境を提供する	A
			国内外の進学ニーズに応えるカレッジカウンセリングを提供する	B
			組織の生産性と財務効率を高める(働き方改革)	B

別紙様式 2 (高)

			内外から信頼される学校運営を行う		B	
		【地域】地域と連携し共に成長する、開かれた学校となる（マーケティング）	アドミッション・ポリシーにもとづく戦略的な生徒募集を行う		A	
			竜一の価値を効果的に伝え優良な関係者との縁を築く		A	
評価項目	具体的目標	具体的方策	担当部署	評価		次年度（学期）への 主な課題
【生徒】21世紀の国際社会に通用する主体的な学び手を創る（ラーニング）	総合知を用いた真正な探究学習を通じ本物の課題解決力を育む（SSH テーマⅠ）	「総合知」を理解し身に着けるためのカリキュラムを開発する	探究	B	C	・ 全校での運営体制の完成 ・ 成功事例の蓄積と発信 ・ ミドルリーダーの育成（続） ・ 生成 AI のさらなる活用促進 ・ 高入生の立ち上げ（続） ・ 「探究的な学び」に向けた教員のリスキリング（続） ―― ・ 社会調査・データ分析のためのデータ基盤・指導モデルの整備・先端プログラムの開発 ・ 評価指標の継続的改善 ・ 国内外コンテストの活用 ・ 校外業務のための社会人基礎力の底上げ
		社会調査の手順を探究のカリキュラムに導入する	探究	B		
		探究に対する教職員の関心と課題解決の基礎知識・技能を底上げする	探究	B		
		多様な人材の知を活用した「開かれた学び」を実践する	探究	A		
		「イノベーション力」（学力・ルーブリック・非認知能力等から）の推移を測定評価する	探究	C		
		「文系」「理系」の文化を日常から放逐する	教頭	A		
		探究のシラバス・教材を HP で公開する	探究	B		
		国内外のコンテストを通じ探究・STEAM 等の卓越人材を育成する	情報科	B		
		探究テーマごとのメンタープールを構築する	探究	A		
		探究や STEAM 教育に取り組む国内外の学校・関係団体との連携を強化する	探究	C		
		生成 AI を活用し探究の効果・効率を向上する	探究	B		
		データ・デジタル技術を活用した先端的な探究プログラムを開発する	探究	C		
		卒業生・保護者等の調査パネルを組織する	探究	B		
	ゆるぎない教科指導を通じ基礎学力を固める（SSH テーマⅡ）	質の高い生徒主体の授業を実践する（個人）	学習	B	C	・ データ分析スキル向上とデータにもとづくカリマネの深化 ・ 生成 AI の積極的活用 ―― ・ 学習姿勢と基礎学力の定着 ・ 発達段階と成績帯に応じた的確な支援 ・ 授業研究の継続・公開 ・ 講座の結果評価と必要な量・質の確保に向けた取捨
		教員同士で学び合う専門家集団（PLC）となる（チーム）	学習	B		
		記憶の再生を超え、生徒の思考力・判断力を伸ばす	学習	B		
		主体的に学びに向かう AGENCY を育てる	学習	B		
		ICT を用いて情報提示を超えた（個に応じた／協働的な）学びを行う	学習	B		
		データにもとづく科学的な到達度管理を行う	学習	A		
		生成 AI を効果的に活用した授業を開発する	学習	A		
		継続的なスパイラル型学習により基礎学力をつける	英語科, 数学科	B		
		まとまった量の文章を読み書きする能力を育てる	国語科	B		
		ニーズに合った質の高い課外・特別講座を提供する	学習	A		
	開かれた学びと異文化との出会いを通じ、自ら行動し創造する力を育てる（SSH テーマⅢ）	異文化間での協創等を通じたイノベーション創発活動を開発する	キャ, 特活	B	B	・ 学ぶ動機につながるキャリア教育プログラムの開発・充実 ・ 生徒の主体的行動の喚起（白龍祭・飛龍祭など） ・ 校外学習・修学旅行・海外研
		生徒の主体性や創造力を発揮する機会を設ける（SSH 行事や特別活動）	特活	A		
		国内外の良質な大会やコンテストを調査・選定する	キャ	C		
		探究とサイエンス部・英語部・自主課外の連携を強化する	探究	B		
	最先端のデータ・デジタル技	高度情報教育を通じ情報分野の卓越人材を育成する	情報科	C	C	

別紙様式 2 (高)

	術を身に着けた、卓越したイノベーション人材を育てる（SSH 重点枠）	先端技術を学ぶ課外講座を開催する	情報科	B		修の行先見直し・継続的改善 ・デジタル・グローバルの課題解決志向への転換と協働促進 ――
		数値解析ツールや CAE ツールを活用したカリキュラムを開発する	数学科, 理科	B		
		「白樺情報」について実践家との TT の体制を構築する	情報科	A		
	異文化との接触を当たり前の日常にする	4(5)技能にわたる英語の基礎学力を定着させる	英語科	B	B	・品質にこだわった校外資源の開拓・取捨（続） ・地域の異文化資源の開拓（続） ・デザイン・アートの拡充 ・戦略的な先端教育の提供、コンテストの選択と集中
		地域の多文化資源を教育資源に替える	キャ	C		
		地域交流・姉妹校開拓等を通じ、継続的な異文化交流の場を構築する	キャ	B		
		英語部をグローバル探究活動の中心として活性化する	キャ	B		
		留学や海外交流プログラムへの参加を促進する	キャ	A		
	ポストヒューマン時代の生き方を啓発し学ぶ動機につなげる	探究・教科横断で 6 年間のキャリア教育カリキュラムを設計する	キャ	C	B	
		社会に開かれたキャリア教育を実施する	キャ	B		
【学校・教職員】時代にあった合理的で生産的な学校運営を行う（オペレーション）	カリキュラム・ポリシーにもとづく 6 年間一貫した学びを提供する	エビデンスベースでの計画と意思決定を行う	キャ（DD）	B	B	・データ分析スキル向上とデータにもとづくカリマネの深化 ・生成 AI の積極的活用（再掲） ・I 期生卒業を受けた振り返りと中期計画の策定
		単位制を活かした中高一貫の教育課程を継続的に改善する	教務	B		
		月次での振り返りと報告を徹底する（カリマネ）	教務	B		
		シラバスにもとづく計画的な授業実践を行う	教務	B		
	生徒の AGENCY（自由と責任を扱う力）を育む学校生活を演出する	HR を安心・安全のホームグラウンドにする	担任, 副担任	A	A	・教員の生徒支援力の向上（SNS、発達障害等） ・生徒会の自治能力向上（続） ・時代に合った部活動の検討 ・校内ルールの更新
		校内のルールをスリムで時代に合ったものとする	生支	B		
		生徒会の自治機能を再興する	特活	C		
		学校行事やホームルーム活動（含委員会）を生徒主体の活動とする	特活	B		
		生徒主体の適正な部活動運営を行う	特活	B		
	多様な学びを促進する学習環境を提供する	いつでもどこでも快適なインターネット環境を維持する	情メ	C	A	・接続問題の原因解析と対策 ・特別棟 i ハブ/C ラボ本運用のための手順整備・活用促進 ・読書習慣の 6 カ年計画の策定
		生徒が集うラーニングコモンズを構築する	情メ	A		
		生徒の読書習慣を強化する（次世代の図書館機能）	情メ	C		
		中高生とも気持ちよく利用できる飛龍館にする	情メ	B		
		ものづくりへの意欲を喚起する	情メ	C		
	国内外の進学ニーズに応えるカレッジカウンセリングを提供する	難関大学への進学を支援する	キャ	B	B	・難関大学に挑戦する意識醸成や環境づくり（続） ・キャリア支援室の利用促進 ・探究と総合型入試の連動 ・海外進学についての支援拡充
		生徒のための「進路指導室」にリノベーションする	キャ	A		
		エビデンスにもとづく出口指導を提供する	キャ	B		
		探究型の学びの出口として総合型入試を積極的に活用する	キャ	C		
		海外進学を支援するプログラムを樹立する	キャ	B		
	組織の生産性と財務効率を高める（働き方改革）	業務（会議・手順・儀式等）の簡素化と断捨離を行う	全教職員	B	B	・業務効率化とデジタル移行の全校的推進 ・6 年一貫（縦串）方針に基づく組織連携と情報共有の強化
		6 年一貫（縦串）方針に準拠した学年運営を行う	学年主任	C		
		財務状況を正しくタイムリーに報告する	事務職員	B		
		校長裁量予算、助成金等の投資管理を徹底する	事務職員	B		

別紙様式 2 (高)

		表簿・帳票を電子化・自動化する	全教職員	C		・財務透明性の向上と投資管理の高度化
		紙媒体の出版物の効果を評価し、取捨する	全教職員	C		
	内外から信頼される学校運営を行う	校内での生徒事故・災害を防止する	生支	A	B	・精神論から仕組み化への脱皮 ―― ・報告・承認の徹底（続） ・現金の扱いの最小化（続） ・教員の生徒支援力の向上（SNS、発達障害等）（再） ・事務処理の標準化とチェック体制の構築 ・部活動運営の適正化（続）
		インシデント情報を速やかに報告する	全教職員	C		
		法令に則ったいじめ防止対策を講ずる	全教職員	B		
		教職員による不祥事を防止する（含：情報セキュリティ・個人情報保護）	全教職員	C		
		正確で公正な事務処理を行う	事務職員	B		
		ミスのない入学者選抜業務を行う	教務	B		
		「ほうれんそう」と起案を徹底する	主任・部長	B		
		中高一貫した生徒の心に寄り添う生徒支援体制を構築する	生支	B		
		ネット系の生徒問題への対応力を向上する	生支	C		
【地域】地域と連携し共に成長する、開かれた学校となる（マーケティング）	アドミッション・ポリシーにもとづく戦略的な生徒募集を行う	ターゲット層に向け学校の魅力を効果的に伝える	マケ	A	A	・ターゲット層への生徒募集活動の継続的改善 ・千葉県の開拓（高校）（続）
	竜一の価値を効果的に伝え優良な関係者との縁を築く	タイムリーに学校のニュースを配信する	マケ	C	A	・プレスリリースのタイムリーな発行、報道媒体の活用 ・対外的活動を担える成熟した教員の獲得・育成 ・マーケティングスキルのさらなる習得と戦略性向上
		適切な媒体で竜一の考えや価値を発信しつながりを醸成する	マケ	A		
		OB / PTA との良好な関係を維持し学校への支援をいただく	マケ	B		
		学校活動を地域・全国に公開／配信する	マケ	C		
		海外における竜一の認知を高め異文化のネットワークを築く	マケ	C		

※ 評価規準：A（達成された）、B（ほぼ達成された）、C（達成されなかった）

別紙様式 2 (高)

＜教科・学年の詳細＞

国語	模試過年度比	過年度比較で上回る偏差値となるよう、指導法を確立する。	C	C	・浮き沈みはあるが概ね良好である。現代文、古典それぞれの領域での安定性が課題である。
	授業満足度 3.6 以上	前期アンケート結果に基づき、後期の授業改善へと結びつける。	B		・わずかだが到達していない項目があるので、教育効果とのバランスも見つつ、改善を目指していく。
	附属中 現代文では漢字力と語彙力を、古典では文法・句法を中心に、基礎学力を確立させ、国語に対する興味関心を育てる。	年間を通して小テストによる振り返りを実施し、語彙力・国語に対する基礎学力を身につけさせる。中1で漢字検定合格70%以上、中2で準2級50%以上取得できるよう学習に取り組む。	B	B	・上位層を伸ばすには（各学年ベネッセ模試Sクラスを5名以上）どういう手段が効果的か。 ・読書習慣を身につけるためにどう生徒に働きかけるか。
		現代文の授業において、論理的に文章を読解する技術を身につけ、文章に積極的に取り組む姿勢を育てる。教科書以外の文章を応用として読ませる。	A		
		古典に対する興味関心をもたせつつ、基本的な文法事項や句法についても理解させる。教科書以外の古典文学を応用として読ませる。	A		
	1年 評論、実用的文章、小説、古文、漢文を読むための知識及び思考力の基礎を養う。	読解や思考の前提となる語彙力を高める。また古典では正確に文法を理解する。	B	B	・今年度築いた土台の学力を基に論理的思考、読解、表現の応用力をつけさせる。
		ICTなども活用して、論理的に文章を読解し思考・表現する力を育てる。	A		
		文学的文章の読解や言語活動を通して、思考の幅を広げる。	B		
	2年 現代文・古文・漢文のそれぞれの応用力を育成、進展させる。	計画的に学習させ、基礎から応用へのステップアップを図る。	B	B	・2学年で培った基礎学力をもとに、大学受験で必要となる実践的な思考力・表現力を身に付けさせる。
		現代語・古語の語彙力を確かなものにする。	B		
		授業や考査の中で大学入試を意識した問題の扱いを徐々に増やし、受験に対応できる学力を身につけさせる。	B		
	3年 現代文、古文、漢文の受験に対応した学力を完成させる。	受験を意識した授業の実践を心がける。	A	B	・3年間を振り返って取り組みについて効果を分析し、効果的なものについては次学年へ情報共有する。
		小論文や評論に対応した、幅広い知識を身につけさせる。	B		
		知識問題についての段階的指導を完成させ、入試に対応する実践力を高める。	B		
地理歴史 ・公民・社会	模試過年度比（別途定義）	過年度比較で上回る偏差値となるよう、指導法を確立する。	C	C	・設定された数値を上回るよう、各科目の受講生徒に合わせた授業のあり方を研究する
	授業満足度 3.6 以上	教材研究と教員間の研鑽を進め、特にアドバンスコースにおいては高度な内容の問いかけと生徒主体の授業の試みを実践する。	B		・研究授業において実践された授業法の共有を通じて、各教員が多様なあり方で授業を実践できることをめざす
	附属中 基礎的な学習内容を習得しつつ主体的に学ぶ姿勢を身につける	授業内容を精選し、基礎・基本的事項の習得を徹底させるとともに、発展的な内容を扱う授業展開を行う。	B	B	・基礎徹底のための取り組みを継続するとともに、生徒それぞれの個性に合わせた授業法を研究する
		生徒それぞれの個性や興味関心に合わせた動機づけを意識しながら、主体的に学ぶ意識を育成する授業展開を行う。	B		

別紙様式 2 (高)

	1年 重要概念の理解および概念を利用して思考・判断する能力を育成する。	積極的な ICT の利用および生徒主体の学びの手法を研究し、探究的学習の実践を通じた重要概念の理解と思考・判断の能力育成をはかる。	B	B	・地歴公民科の学びに生徒が主体的に取り組みたいと思えるような様々な授業の実践を進め、成果があると判断できたものについては積極的に共有していく
		新課程科目（歴史総合・公共・地理総合）における実践の成果、および評価の手法の、共有・深化を進める。	B		
	2年 1年で獲得した能力をさらにのばしつつ、受験に対応できる学力を育成する。	ICT の利用を積極的に進めつつ、主体的な学びの手法を発展、継続と、質の高い知識伝達型の授業のベストミックスをはかることによって、論理的思考に裏づけられた内容の理解をめざす。	B	B	・前半はその科目の面白さ、楽しさを重視し、生徒自身が主体的に知識を身につけていきたいと思えるような授業をめざす。後半は受験に向けた着実な知識の習得を重視した授業を行う。
		単純な用語の暗記ではなく、概念を利用した論理的理解を基礎として、受験に対応できる学力の確実な習得と定着をはかる。	B		
	3年 受験に対応できる学力を確立する。	過去の共通テストやセンター試験ならびに大学入試問題等を十分に研究し、その成果を教員間で共有することで、チームとして学習指導の改善をはかる。	B	B	・各教員が過去問研究に熱心に取り組んでいる現状を踏まえ、そこから学び取れたことの共有の手法を研究していく
		論述問題への対策が必要な生徒に対し、個別指導を中心に高度な問題に対応できる能力を獲得できるよう支援する。	B		
	模試過年度比（別途定義）	過年度比較で上回る偏差値となるよう、指導法を確立する。	B	B	・学年によるばらつきが大きいので、教科として安定した指導ができるようノウハウを共有していく
	授業満足度 3.6 以上	生徒個人へ寄り添いつつ、全体を導くことのできる存在として、結果を伴った成功体験を積み重ねつつ信頼関係を築く。	B		
	附属中 様々な数学的な見方や考え方を学び、数学に対する関心や意欲を高め、学習習慣および中学校数学の基礎を固めると共に、6年間を見通した体系的な学び、発展的な学びを実践する。	日々の授業において、内容を精選し基礎の確実な理解と定着を図り、それを基に思考力・判断力・表現力の伸長を図る。	B	B	・少人数指導を継続し、生徒の学力に応じた指導を行っていく。
		授業と連携した宿題を定期的に課し、家庭における学習習慣と基礎学力の確立を図る。	B		
		関連する高校の学習内容や難易度の高い題材に触れることで、深く思考する機会を設けると共に、中高一環教育の環境を活かした体系的な学びを行う。	B		
	1年 様々な数学的な見方考え方を学び、数学に対する関心・意欲を高め、学習習慣および高等学校数学の基礎を固める。	日々の授業においては、内容を精選し基礎の確実な理解と定着や習熟に応じた発展的な内容をグループ活動を通して、探究的に取り組ませる。	B	B	・大学入試に対応できるための基礎学力の育成・定着を目指す。
		1週間に2回、朝にデジタル機材を通して、教材表示や、課題配布を行う。	B		
		授業と連携した宿題を定期的に課し、家庭における学習習慣と基礎学力の確立を図る。	B		
		定期的に小テスト等を企画し、基礎学力を評価するとともに、そこで得た情報を基に弱点の強化を行う。	B		
	2年 授業内容の確実な定着を目指し、きめ細かい支援、科目の重要性についての意識の涵養などの多面的な指導を行う。	授業展開の工夫やスパイラル学習を通じて、基礎の確実な理解を図ると共に、定着や習熟に応じた発展的な内容にも探究的に取り組むなど、全ての生徒が習熟に応じた学びを得るよう展開する。	B	B	・大学入試に対応できる思考力の育成を目指す。
		年間を通じて精選した課題を与え、生徒の取り組みを徹底させる。	B		
		授業進度だけでなく、弱点単元の分析も通じて定期的考査や小テストの範囲を設定することで、実践的学力の定着を図る。	B		
	3年 生徒の進路実現に向け、大学入試に必要な学力を身に付ける。	大学入試を意識した授業を実践する。	B	B	・大学入試に対応できる思考力の育成が必要
		各種テストを通して、計画的な学習を支援する。	B		

別紙様式 2 (高)

		各分野の問題演習を通じて、大学入試に対応できる学力を養う。	B		
理科	模試過年度比（別途定義）	過年度比較で上回る偏差値となるよう、指導法を確立する。	B	B	・社会系に属する生徒に対する、活用する力の育成
	授業満足度 3.6 以上	生徒を対象とした学習の理解度・到達度等に関してアンケートを用いて確認し、今の生徒にとって最もふさわしい授業展開を常に考え、工夫を続ける。	B		・生徒に対する「学び方の指導」の充実
	授業内容を常に深化させながらも、理科に求められるゆるぎない指導を通じて、生徒が自身の希望進路を実現できる基礎学力の向上を図る。	シラバスに沿った授業展開を心がけ、質の高い生徒主体の授業を実践するとともに、担当者間で情報交換を積極的に行い、教員同士で学び合う集団となる。	B	B	・授業研究の充実。特に、校内で行われる 3 回の公開以外にも、積極的に授業を見せ合い授業改善について議論できる環境を整備する。
		生徒にとって適切な内容・分量の課題を提示するとともに、小テストによる振り返りを行い、生徒の学習習慣の確立とスモールステップでの学習管理を図る。	B		
		必要に応じ、生徒との個別面談や指導を行い、難関大学受験に対応したより高い思考力を養成するための機会を生徒に提供する。	B		
	自然や自然現象に対する興味・関心を高め、知識の活用能力と思考力を高める授業展開に努める。	観察・実験をバランスよく実施し、実物に触れることにより興味・関心を喚起し、概念理解の深化を図る。	B	B	・特別棟の長寿命化耐震工事を終え、来年度は 4 月から実験室での授業が可能となるため、有機的な活用を図る。
		自然や自然現象と科学との関連を取り上げることで、科学への興味・関心を高めて知識の活用を促すとともに、記憶の再生を超えて生徒の思考力・判断力を育成する。	B		
		ICT はもちろんのこと、数値解析ツールや CAE ツールを活用した質の高い生徒主体の授業を実践し、授業への興味・関心を高め、より深い思考力を育てる。	B		
保健体育	授業満足度の平均値が 3.6 以上	ICT を積極的に用いながら課題解決の意欲を高めていくことで種目の持つ特性や魅力に触れ、運動の楽しさや喜びを促す。	C	C	・持久走など士気が下がりがちな種目においても、生徒が目標をもって意欲的に参加できるよう指導を工夫し、学習への満足度をさらに高めていく必要がある。
	身体運動を通じて運動に親しむ態度を育て、豊かなスポーツライフを形成できる資質・能力を育成する。	自己の体力や生活に応じた体力を高めるための運動を合理的な方法で身につけさせる。	B	B	・健康・安全についての理解を深めるとともに、コミュニケーションを図りながら怪我の防止や安全管理を意識し、積極的に運動に取り組む姿勢を身に付けることができた。 ・大怪我はなかったものの授業中での怪我が発生する事案が数件あったため、危機管理を徹底する必要がある。
		各種の運動の合理的な実践を通して自己の課題を見つけ、解決できる能力を身につけさせる。	B		
		各種の運動を通しての相互理解・尊重の態度を身につけさせ、コミュニケーション能力を育てる。	B		
		熱中症や怪我を防止するため、安全管理に留意して授業を行う。	B		
	生涯を通じて自らの健康や環境を適切に管理し、改善していくための資質・能力を育む。	健康に対する知識や実践力を養い、課題解決能力を身につけさせ、明るく豊かで活力ある生活を育む態度を育てる。	B	B	・健康を保持・増進するための具体的な取組を考えさせることで、生徒の興味・関心を深めるとともに、自らの健康や周囲の環境を適切に管理しようとする能力を育成することができた。次年度は、学びを日常生活へと結び付け、継続的な実践につなげることを課題としたい。
		社会生活及び各個人の生活における健康・安全管理について、課題の解決に役立つ基本的な知識を理解する。	B		
		ICT を活用して視聴覚教材を積極的に提示することで、授業への興味・関心を高め、より深い理解を促す。	B		
芸術	授業満足度の平均値が 3.6 以上	提出物や実技発表を通して技能の習熟度を図り、成功体験を積み重ねることで授業への積極的な取り組みを促す。	C	B	・各教科の特性を生かした授業作りを継続していきたい。

別紙様式 2 (高)

	芸術を愛好する心情を育てるとともに、芸術の諸能力を伸ばし芸術文化についての理解を深める。	表現及び鑑賞の活動において、ICT を効果的に活用する	B	A	・教科の特性上、実際に手を動かす、頭で考える、やってみることが中心なので、ICT を補佐的に活用していきたい。今後も自己表現することの楽しさが実感できるよう授業を展開していきたい。
		多様な芸術表現を経験する中で、他者と協働しながら表現を生み出したり、表現したりするための技能を身に付ける。	A		
		日本や諸外国の芸術作品を鑑賞し、理解を深める。	A		
英語	模試過年度比（別途定義）	過年度比較で上回る偏差値となるよう、指導法を確立する。	C	C	・学年・科目をまたいだ6年間の指導在り方を再考する必要がある
	授業満足度 3.6 以上	互見授業や授業者間の意見交換による授業改善を通して、アウトプット中心の生徒のやる気や知的好奇心を引き出す授業を実践する。	C	B	・教科での研修を増やし、授業改善に取り組むとともに、英語科としての新たな指導方針を構築する
		毎週の単語小テストで振り返りつつ定着させることで、基本的な語彙を身につけさせる。	B		
		基本的文法事項を習得させ、英文を読む力と書く力を培う。	B		
		授業や家庭学習でリスニングの指導に力を入れ、英語を聞く力を養う。	B		
	附属中 英語に対する意欲及び興味・関心を高め、「読む」「書く」「聞く」「話す」の4領域について基礎学力の定着を図る。	ALT とのチームティーチングを通して、話す力やコミュニケーション能力を育てる。	A		・全体的に4技能5領域について基礎力を定着させることができたが、英語を苦手とする生徒への個別の支援をさらに充実させていきたい。
	1年 主体的・自律的に英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、「読む」「書く」「聞く」「話す」の4技能5領域について基礎学力の定着を図る。	BYOD 端末を活用し、効果的なライティング活動を取り入れる。	B	B	・アドバンストコースとスタンダードコースで共有できる部分をもっと増やす必要がある。進度や学習形態、指導方法など進めていきたい。 ・生成 AI の活用が単発的になってしまった。年間を通して計画するだけでなく、中学・高2とも連携を図っていく必要がある。
		ICT を活用し、国内外の情報を授業に取り入れる。	B		
		教員間の連携を強化し、指導の明確化や生徒の適切な評価につなげる。	C		
		ALT とのチームティーチングを通して、話す力やコミュニケーション能力を育てる。	B		
		外部英語検定受験を奨励し、CEFR A2レベル（英検準2級以上）の力を身に付ける。	B		
		ディベート活動や AI を活用した学習を通して、思考力と表現力を身につける。	C		
	2年 主体的・自律的に英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、「読む」「書く」「聞く」「話す」の4技能5領域について学力の向上を図る。	毎週の単語小テストで振り返りつつ定着させることで、大学入試に必要な語彙を身につける。	A	B	・リスニング強化が年度の途中からになってしまったので、年間を通じて実施するように修正したい。 ・基本文法事項の定着をどのように習熟させるのか、次年度からは特別講座を開講することで、その効果を検証したい。
		基本文法事項を習熟させ、英文を読み要約する力と、論理的に書く力を高める。	B		
		授業や家庭学習でのリスニング学習を定着させ、英語を聞く力を養う。	B		
		ALT とのチームティーチングを通して、意欲的にコミュニケーションを取ろうとする態度を育成し、自然な英語表現を使って自己の考えを述べる力を身につける。	B		
		外部英語検定受験を奨励し、CEFR B1レベル（英検2級以上）の力を身につける。	B		
		英語によるディベート活動やディスカッション活動を実施し、英語の運用能力と論理的思考力を身につける。	B		
	3年 英語運用能力を修め、進路実現に必要な知識を習得する。	平常の授業において、受験に対応した総合的な学力を高めさせるとともに、新しい入試形式を研究し、対応できる英語力の育成を図る	B	B	・生徒の実態に合わせた指導ができた。これから国立二次試験に向けた生徒への個別の支援を充実させたい。
		各テストを通して、受験に向けた計画的な学習を支援していく。	B		
		生徒の状況に応じた課外授業及び個別指導を実施する。	B		

別紙様式 2 (高)

		授業・指導法の研究に努め、平常授業の充実を図る。	B		
家庭	授業満足度の平均値が 3.6 以上	達成感、確かな知識と技能の定着が図られるよう、学びの場の工夫と個に応じた指導の徹底を図る。	C	C	・個に応じた学習の工夫・充実により授業改善を推進し、個々の深い理解と満足度の向上を図る。
	家族や家庭生活に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させる。	具体的な教材や実習内容を取り入れ、定期的なフィードバックを実践する。	B	B	・相互評価によるフィードバックの充実により成果が得られた。次年度はさらなる学習効果の向上に向け、実施頻度の最適化および活用場面の精査を図りたい。
	基礎的・基本的な知識と技術を習得させる。	生涯にわたり生きて働く基礎的な知識と技能を確実に身に付ける。	B	B	・実習は年間計画通り実施できたが、今後は個々の技術を確実に定着させるため、十分な時間の確保と指導内容のさらなる精査が課題である。
		フィールドワークやグループワークを通じて実体験を重視する工夫を図る。	B		
	生活の充実向上を図る力と実践的な態度を育成する。主体的に課題を見出し解決できる力と態度の育成を通し、探求力を育てる。	理論と実習の関連性を強調した授業計画を作成する。	B	B	・ホームプロジェクトを通じ、探究力の向上に顕著な成果が得られた。次年度は、自己表現の深化を促す指導を課題として掲げ、表現の機会を多角的に創出することで、探究活動をより高次へと発展させる取り組みを推進したい。
		ホームプロジェクトの実践を通して、グループディスカッションやプレゼンテーションによる自己表現力の向上と自己理解を図る。	A		
情報・技術	授業満足度の平均値が 3.6 以上	活動的な学びの機会を増やし、実感とともに理解を深められるように指導を工夫する。	C	C	・理解と納得を深める授業づくりを行う ・指導内容の整理を行う
	生徒の実践的な情報活用能力を育て、学習や探究活動に情報技術を活用できるようにする。	各単元において、情報技術を活用した課題解決型の授業を実施し、生徒が自ら手を動かして学べるようにする。	B	B	・課題解決型授業を開発する ・教科間の連携を意識した授業づくりを行う ・継続的な生成 AI の活用実践を進める
		各教科・他教科との連携を図り、情報技術の横断的な活用経験を積ませる。	B		
		生成 AI の活用について年間を通じて指導し、生徒自身が有効にかつ主体的に使えるようにする。	B		
	生徒に情報技術について科学的に理解させ、情報技術の適切な利用の態度と理論を身に付けさせる。	テストや教材を工夫し、学習活動が深い理解と論理的思考に結びつくようにする。	A	B	・必要な学力を身に着けるための活動の充実させる ・情報技術の本質的理解を促す思考の時間を確保する ・プログラミングの技能を一定レベル習得できる活動を開発する
		情報技術の基本的な仕組みや考え方を、段階的かつ具体的な活動（観察・操作・演習）を通して理解できる授業設計を行う。	B		
		プログラミング演習などを通じて、情報技術の仕組みを体感的に理解させ、概念と操作を結びつける。	B		
	生徒に情報技術が社会で果たす役割について理解させ、主体的に情報社会に参画する態度を育てる。	生徒による授業内容の振り返りと、それに対するフィードバックを毎時間取り入れ、内省を促す。	B	B	・生徒へのフィードバックを強化する ・生徒間における意見交換の機会を増やす ・社会に開かれた学びの機会を増やす
		社会課題や最新の ICT 活用事例を扱った教材を用いて、情報技術の社会的影響について他者と意見交換する機会を設ける。	B		
		授業外の活動や学校外での活動を生徒に紹介し、社会との接点を持たせるよう支援する。	B		
附属中	基本的生活習慣の確立	服装や言葉遣い、時間やルールの遵守を中心に、自律した学校生活が送れるよう、授業や学校行事、休み時間等を通して、教員間や家庭と連携して生徒の社会性が育つよう指導する。	B	B	・社会性を持ち、自律できる生徒を育む支援のあり方を、検討する。。
	学習習慣の確立と学力の向上	面談や ICT を活用し、予習・復習や家庭学習の状況を把握し、個の能力や環境に合わせて適切に指導	B	B	・各教科、担任と連携しながら教科間の課題につい

別紙様式 2 (高)

		する。生徒の興味や関心、個性を教育活動で引き出し、コンテスト等何事にも積極的に挑戦しようとする態度を育てる。少人数学習の実施やICTの活用を通して、個に応じた学習指導を展開する。中高一貫教育校の強みを活かして、学習の先取りや深い学び、異年齢学習、探究的な学習を実践し、生徒の能力の伸長を図る。			て「効果的な学習方法」を検討する。 ・少人数学習、ICT、生成AI、先取り学習、教科横断、外部コンテストへの応募など、今後とも効果的な学習指導を展開し、生徒個々人の能力が高められるよう支援していく。
	キャリア教育の充実	探究活動、企業・研究所訪問や外部講師による講演会、模擬授業等を通して、知識や思考力の向上を図るとともに将来の職業について考えさせる。 語学研修やICTを用いた海外の中学生等との交流により視野を広げ、世界に羽ばたく人材の育成を目指す。	A	A	・今後とも外部機関との研修や、語学学習、講演会の機会を通してキャリア教育の充実を図る。 ・中学2年生が来年度も広島観智学園との交流を図るなら、スライド発表の時間等を検討し、負担にならないようにしたい。
	心身の健康管理	複数担任制を展開し、多感な年齢の生徒のみならず不安を抱える保護者へのサポートの充実を図る。年間3回以上の面談を実施する。また、教員間や保護者、スクールカウンセラーと連携し、生徒が心身ともに健康な学校生活を送れるよう支援する。	B	B	・引き続き、保護者との連携を図り、関係機関やSC、SSW等ともスムーズにつなげていきたい。
	働き方改革	公立学校の教師の勤務時間の上限に関するガイドライン（文部科学省）に則り、在校等時間（校外での勤務を含む）について1か月の超過勤務45時間以内、1年間の超過勤務360時間以内を目指す。そのために原則定時の出退勤と有休・代休の消化を心掛け、中学・高校を通じた業務の共通化、仕事の精選と分散、ICTの活用等で会議や仕事の効率化・生産性を向上させる。	A	A	・引き続き、仕事の効率化、生産性の向上を目指し、働き方改革を進める。
第1学年	生活習慣の確立とコミュニケーションの促進	凡事徹底、報連相の徹底、時間厳守を目標に、安定した生活習慣を確立させる。	B	B	・日記を継続して、良好な関係づくりに努めた が、画期的な効果はなかった。実施方法に工夫が必要だと思われる。
		日記を活用して教師と生徒、生徒同士のコミュニケーションを促進し、学年内の人間関係を活性化させる。	A		
	基礎学力の定着と自立学習の充実	初期指導の充実を図り、授業を中心とした予習復習のサイクルが確立できるよう、授業およびホームルーム・学年集会、通信を通して継続的な指導に取り組む。	A	B	・ホームルーム、通信、臨時の学年集会などで予習復習のサイクルを確立を訴えてきたが、締約には至らず。集団への指導ではなく、個別評価が必要だと思われる。
		生徒が授業内容を確実に定着できるよう、各教科で連携して課題や形成テストの量を調整するとともに、ICT端末を活用した学びを積極的に取り入れて、学習意欲と協働的学習の質の向上を図る。	C		
		手帳や通信を活用して、自ら計画を立て行動する習慣を身につけさせる。	C		
	探究&キャリア教育の充実	LHRの時間を中心として、進路意識が高められるように、将来の目標や職業観などを育む指導を行うとともに、計画的に2年次の文理コース選択に向けて適切な指導を行う。	B	B	・文化祭を題材にした探究活動はワークしたと考えられる。一方、「イノベーション力」など言葉だけが独り歩きし、その意味、内容が伴わない活動が多かった。探究と各行事との連携が必須だと思われる。
		他部署と連携し、生徒の職業観、仕事観をより深める行事を企画・実施する。	B		
		探究を通して、イノベーション力を向上させるための支援をする。	C		
		課題解決的なアプローチを文化祭を通して学ばせる。	A		
	心身の健康管理	生徒一人一人の心身の成長とともに、健康的な学校生活を送れるよう、保健部やスクールカウンセラー、保護者と連携しながら、生徒個々の問題の早期発見に努め、適切な指導を行う。	B	B	・保健部や養護教諭との連携はうまく行っていたと思う。ただし、事後対応になりがちだったので、プロアクティブな対応を実施していきたい。
	生徒の主体性、創造性を発揮する場を提供する	文化祭、FMY先輩と語る会等の行事で、生徒の自主性や創造的な活動を積極的に取り入れる。	A	A	・FMT先輩と語る会など、生徒の要望に対応して、企画をすることができたのは大きな成果。

別紙様式 2 (高)

第2学年	生活習慣の確立とコミュニケーションの促進	挨拶の励行や、時間・期限の厳守など、凡事徹底を図り、安定した生活習慣を確立させる。また、教師と生徒、生徒同士のコミュニケーションを促進し、学年内の人間関係を活性化する。	A	A	・生徒同士だけでなく様々な人たちとの関わりを通して、コミュニケーション能力が高まった。3年次においてさらに伸ばしたい。
	学習習慣の確立と学力の定着	授業を中心とした予習復習のサイクルの確立と家庭学習時間の確保ができるよう、授業およびホームルーム・学年集会を通して継続的な指導に取り組む。	B	B	・生徒は学年開始当初に比べて、計画を立てて学習に取り組むことができるようになってきた。各教科において長文問題を読み解く速さとの確さが身についてきており、指導の成果が見えつつある。大学受験に向けてさらに細かい指導を心掛けたい。
		生徒が確実に学習内容を定着できるように、各教科で効果的な指導法を工夫するとともに、ICT も用いて、質の高い授業を提供する。	B		
		手帳などを活用しながら、生徒自身が主体的に計画を立て行動する力を身につけさせる。	B		
		全てのコースにおいて探究活動に取り組みせ、論理的思考力、問題解決能力を向上させる。	A		
	キャリア教育の充実	LHRや進路行事（学部・学科研究やRガイダンス）などを通じて進路意識を高め、自分の進路希望を具体化させる。 進路指導部と連携し、新課程入試に関する情報を収集し、生徒・保護者に適切に提供することで、少しでも安心して大学受験に臨めるよう配慮する。また、積極的に模擬試験を活用し、新課程入試への準備・分析を進める。 進路指導部、探究部、グローバルと連携し、様々な入試方法で国内外の難関／優良大学への進学を目指す体制をつくり、生徒の進路実現の可能性を広げる。	A A B	A	・各生徒は高校卒業後の明確な目標を見据えて、学習・研究に取り組もうとする姿勢を示した。今後はより高い目標を実現させるために個人個人への指導を徹底したい。
第3学年	心身の健康管理	生徒一人一人が安心して健康的に学校生活が送れるように、保健部や保護者、スクールカウンセラーと連携し、諸問題の早期発見に努め、適切な指導を行う。諸問題にはいじめの防止も含む。	A	A	・いじめ等の報告はなく、生徒は安心して学校生活を送ることができた。
	働き方改革	業務内容については学年担当者内で適切に分担することで、個々の職員が力を発揮できる学年環境を整える。	A	A	・業務内容を適切に割り振り、各職員が責任を持った取り組みを示していた。
	学力の向上	2年次までの取り組みを継承し、予習・授業・復習のサイクルの重要性を踏まえながら、さらに発展的学習に自主的に取り組む姿勢を養う。	B	B	・学習姿勢については個人に委ねる部分も大きかった。
	学習習慣の確立と基礎学力の定着 基本的生活習慣の確立	各教科で、年度当初から入試を意識した指導を行い、適切な時期に、適切な課題・指示を与えるように努め、学年教科担当者が相互に連携をとりながら、学習意欲の向上を図る。	B	B	・科目や学年間で調整をして指導の方向性を概ね統一することができた。特に、特編授業や共通テストまでの学習スケジュールは適切で効果的であった。次年度以降も全体のスケジュールを見据えつつ、毎回の授業改善を進めていきたい。
		学力テスト・模擬試験の結果分析、大学入試問題の出題傾向の分析結果を授業に反映させ、授業内容の充実を図るとともに、受験勉強のペース・指針を生徒に示し続ける。	B		
		最上級生として、後輩の模範となるよう規律ある生活に努め、学校行事や部活動において、それぞれの持ち場で中心的役割を果たせるよう支援する。	B		
		手帳を活用しながら、学習を中心とした毎日の生活習慣を自己管理させるとともに、長期的な目標にむけて自主的に計画を立て行動できるよう支援する。	B		
	キャリア教育の充実	生徒の学習成績や進路情報を学年で共有し、生徒や保護者に有効に提供できるようにする。 LHR、学年集会、講演会等を通して、入試や志望校の研究に努め、目標に向かって邁進する環境・雰囲気醸成する。 生徒との面談や保護者との意思疎通を密にし、必要に応じて学年外の職員の協力を得ながら、適切な進路支援ができる態勢をつくる。	A B A	A	・模擬試験の分析や各種研修会での情報を踏まえて、担任の先生と生徒との面談を中心としてきめ細かい進路指導を実施した。推薦指導においては、全教職員の協力を得て指導を進めることができた。

別紙様式 2（高）

	心身の健康管理	生徒が心身ともに健康な学校生活を送れるように留意し、生徒の問題の早期発見に努め、生徒支援部や養護教諭、保護者と連携しながら適切な支援を行う。	B	B	・適切に各部署と連携し、生徒の健康管理に努めた。心身のケアが必要な生徒の情報共有をしながら全体で支援することができた。
--	---------	--	---	---	---

※ 評価規準：A（達成された）、B（ほぼ達成された）、C（達成されなかった）